

EIZO HISTORY

EIZO Co.,Ltd

EIZO HISTORY



EIZO Co.,Ltd

E I Z O H I S T O R Y

- 1 モデリストEIZOの生いたち
- 2 敗戦後の苦難の道
- 3 生きることの厳しさ
- 4 災い転じて福
- 5 紳士靴から婦人靴にチャレンジ
- 6 創造の喜び
- 7 得手に帆を揚げる
- 8 不況の波
- 9 ブーツブームに乗る
- 10 自社ブランドEIZO開発
- 11 グローバル化の波に対応して
- 12 顧客満足度120%を目指す
- 13 靴とは我が命

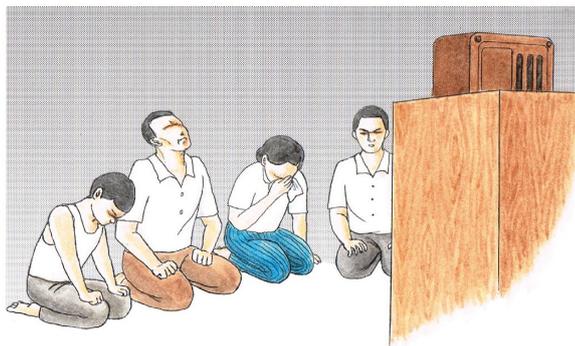
1 モデリストEIZOの生いたち

栄三は昭和5年、東京都台東区に乾物屋の4人兄弟の末っ子として生まれました。栄三が小学生の時、日本は、日・中戦争から太平洋戦争へと破局の坂を転じて行きました。

昭和20年3月10日、東京は米軍の空爆により火の海と化し、一夜にして焼け野原となり、10万以上の方が犠牲になりました。



米軍の爆撃機B-29による爆弾投下



玉音放送により終戦が伝えられる



瓦礫で作った仮設小屋で生活し雨風をしのぐ

当時、栄三は墨田区に住んでいました
が奇跡的にもその周辺だけが焼け残り、
命拾いしました。
8月6日広島、9日に長崎に原爆が投下
され、ソ連軍(現ロシア)の対日宣戦布告
があり、15日正午、昭和天皇の御聖断に
より日本は無条件降伏し、平和が戻って
きました。
平和が戻っては来たものの、日本全土
は破壊され、住む家も食べ物も、着る物
もなく、餓死する寸前になりました。



爆撃による大火で一面焼け野原となった

2 敗戦後の苦難の道

昭和21年、栄三の父は過労がもとで51歳の若さで病死しました。

長兄は陸軍に入隊し、満州に出征していましたが、敗戦と同時にソ連軍の捕虜となり、酷寒の遠いシベリアの奥地に拉致されて強制労働をさせられ、いつ帰れるか解りませんでした。



家族写真(著者右下)



シベリアでの強制労働の様子

敗戦後、日本はもの凄いインフレに見舞われて、それを抑えるために物価統制令が敷かれ、国民の預金は封鎖され、一世帯、一ヶ月500円しかおろすことが出来ず、栄三と次兄が働いて家計を助けるしかありませんでした。

昭和21年5月、栄三は旧制中学校4年で退学し、墨田区にあった大同製靴という靴工場で働き始めました。

栄三は、「手に職を付ければ一生喰いっぱぐれはない」と云われ、一日も早く仕事を覚えて一人前になりたいと思い、必死でした。

然し、最初にさせられた仕事は、靴の詰まったダンボール箱を、小さな身体の栄三が肩に担いで運んだり、雑用に追い回される毎日でした。



靴の詰まったダンボール箱を運ぶ著者

3 生きることの厳しさ

栄三の初任給は日給で5円、休みは月2回で皆勤手当を加えて一ヶ月150円しかもらえませんでした。

敗戦後、すべての物資が不足して物価が急騰し、到底並の給料では食べて行けませんでした。

食糧も配給制になりましたが、必要な量の $\frac{1}{5}$ ぐらいしか支給されず、お米はほとんど0(ゼロ)。米軍の放出物資で家畜用の餌と思われる大豆のしぼりかすが配給されたりしました。まともに働いても食べて行けないので、人々は露天商となって稼ぐようになりました。

これを闇市と云いましたが、そこでは、さつま芋が三切れ一皿10円で売られていました。栄三が一日一生懸命働いても、さつま芋が一切れ半しか買えない現実に愕然としました。

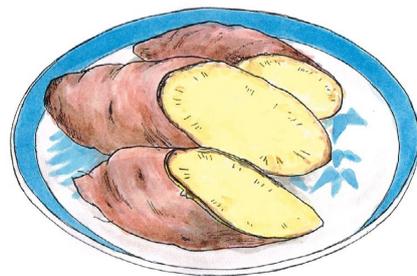
栄三は末っ子だから、着る物はいつも兄のお下がり、しかも昔は今と違い、服が破れていても、つくろってあれば恥ではないと云われ着せられました。

「うちの親は何てケチなのだろう」と思っていました。自分が働いてみて、自分一人の食すら満たせない程、厳しい現実に直面し、初めて親の有難さが解ったのでした。



闇市の様子

さつま芋は三切れ一皿10円



4 災い転じて福

昭和23年1月、栄三が風邪で寝込んでいる内に会社が倒産してしまいました。これは大変なことになったと思いますが、幸運にも次の職場を紹介して頂いた所、そこでは一人前の底付職人として通用してしまいました。

当時、職人になるのに通常4年は掛かるところを、栄三は正味1年間の経験しかなかったのに、紳士靴の底付職人として通用してしまったのです。その工場では、すべて手工製だったので、一人一日1足半くらいしか出来ませんでした。

栄三は職人になったものの学業を捨て切れず、夜間高校に通学しましたが、当時は大変な電力不足で毎晩停電し、カーバイトランプで黒板を照らすのですが、光が反射して字がよく見えず、授業はかなり遅れていました。

自分の将来について、いろいろ迷いましたが、靴作りの奥の深さ・面白さに段々引き込まれて行きました。自分は物作りが好きだし、いささか器用な方なので、この道を極め、精進することによって社会に貢献することが出来るなら、それが一番良い事なのだ。こう思った時、それまでの迷いがふっ切れて、高校を中退し、より一層この道ひと筋に靴作りに励むようになりました。



定時制高校の制服での著者(左端、18歳) 高塚製靴の慰安旅行にて



5 紳士靴から婦人靴へチャレンジ

昭和24年、栄三は台東区猿若町の靴メーカーにお世話になりました。

さすがに浅草は靴屋のメッカだけあって、職人はかなりの名人級もいて、大変勉強になりました。

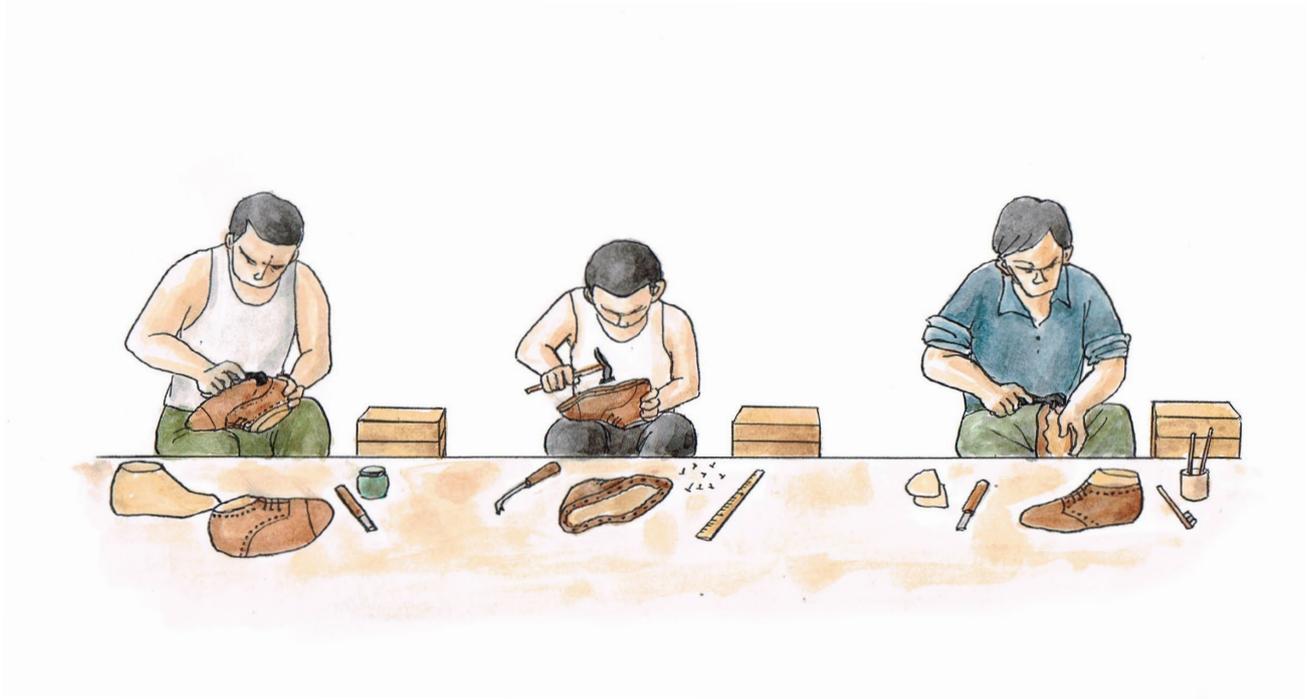
戦後の洋風化と共に、婦人靴は年々需要が高まって、昭和25年になるとパンプスが売れるようになりましたが、それを作れる職人がいませんでした。

社長から「誰かパンプスをやってくれないかな」と云われましたが、紳士靴と婦人靴とでは大分勝手が違う。やり付けないものをやると、収入が「ガクッ」と落ちてしまうので、皆尻込みをしてやりたがらなかったが、栄三は意欲的に何でも習得したいと思っていたので、進んで買って出ました。

仕事は職人のためにやるのではなく、すべてお客様のためにやるのだから、栄三は頼まれれば何でも進んでやりました。

その精神は、お客様が求めるものであれば難度の高い靴でも厭わず、ひたすらに作り続けるというEIZOの社風として続いております。





他の職人の中で紳士靴を作る著者(中央、19歳)

6 創造の喜び

昭和30年の初夏、長年の夢だった婦人靴メーカーを始めようと決意し、パンプスの木型作りに取り掛かりました。

フェミニンで、おしゃれな婦人靴と云えば、何と云ってもハイヒールのプレーンパンプスです。

栄三は、靴の木型作りについては全くの素人でしたが、小売店さんからの依頼で、お客様の足型をもとにしてオーダー靴を数多くこなしてきた経験を活かし、出来るだけ横幅の肉付きを十分付けながらも、押さえる所は押さえ、なるべく足がスマートに見えるように、底型を工夫して作ってみました。

トゥラインや、踏まずのアーチ、グラマラスな踵と、それにマッチしたヒールのカーブ、それらが一体となった、流れるような美しい線を追求して栄三は心を傾けました。

紙型についても、底付の経験から、実際に鈎込んだ場合のトップラインの変化を想定して美しい線を描くように、V(ブイ)カットの型紙を裁って見ました。

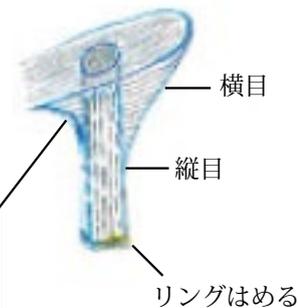
妻が製甲を作り、栄三が底付をして、二人で仕上をして、美しいシルエットのパンプスが完成した時は、天にも昇る気持ちでした。



V(ブイ)カットのプレーンパンプスを作る



木製ヒールを使ったパンプス



昔は、木製の細いヒールを作る場合には、強度を保つため、木材を横目と縦目を組ませて繋ぎ合わせ、接地面を強化するためにリフト部分に真鍮のリングをはめて補強した。

7 得手に帆を揚げる

創業当初は、栄三と妻と従業員合わせて5名でスタートしましたが、折からの神武景気に支えられ、聖天町の問屋さんのお取引を頂くようになってからは、量的にも、まとまった受注が得られるようになり、追い風に乗ることが出来ました。

日産50足しか上りませんでしたが、いくら作っても間に合わず、毎日のように問屋の番頭さんが品物を取りに来られ、仕上のお手伝いまでして持って行かれる始末でした。

問屋の社長からは「仕上などはどうでも良いから、もっと早く納品を」と云われましたが、すべて自分で仕上をして、納得の行かない靴は一足たりとも納めませんでしたので、商売は順調に行き、昭和34年3月、資本金50万円で(有)松村製靴所を設立しました。従業員は12名、第一期売上は、年商130万円でした。



オープントゥ ハイヒール

8 不況の波

昭和37年頃から、婦人靴業界では各メーカーが競って設備の近代化を図り、量産体制を確立すべく、地方に工場を建設する動きが目立つようになってきました。

昭和39年の夏、EIZOは埼玉県草加市に工場と社員寮を併せた540㎡の新社屋を建設し、各種機械を導入、量産体制を整えました。

然し、折悪しく東京オリンピック後の不況に見舞われ、生産過剰による値崩れが甚だしく、当時のトップクラスの婦人靴メーカーが倒産したり、大変苦労しました。

栄枯盛衰は世の習い、EIZOも幾多の試練に出合ってきましたが、それを乗り越えて来られたのは、ひとえに新製品の開発にありました。



試作を重ねて開発した
ストーム入りハイヒールが大ヒット

9 ブーツブームに乗る

それ迄、ブーツは単なる防寒靴でしたが、昭和50年頃からはファッションとして注目されるようになってきました。

最初、ロングの編上げや、プレーンの内側ファスナーのフィットブーツがヒットしましたが、ジョッキータイプのルーズブーツが求められるようになりました。試作を重ねましたが、踵の部分の設計がどうもうまく出来ませんでした。

そこで、これはどうしても本場のヨーロッパへ行つて資料を収集してこなくてはいけないと思い、昭和51年12月10日、急きょデザイナーの小林氏を同行し、日本を発ちました。

新しいブーツを求めて、パリの街を皮切りに、イタリアのミラノ、フィレンツェ、ローマなど、ヨーロッパの一流の靴店をくまなく見て歩きました。

さすがイタリアは靴の先進国、栄三は正に宝の山に入ったような感じで朝から晩迄、足が棒になる迄歩きました。

最後のローマの夜は、丁度クリスマススイブに当り、高級ブティックの並ぶ街路の中央に飾られた沢山のクリスマスツリーがキラキラ輝いて、一瞬息を飲むほどの美しさでした。

こうして、収集してきた資料をもとに、今迄に無い新しいブーツの開発に成功し、折からのブーツブームの波に乗り、昭和50年年商4億7千万円から、平成2年年商36億3千万円と、15年間で実に7.7倍に急成長することが出来ました。



ヨーロッパでサンプリングしたロングブーツ



イタリア・ミラノにて(著者右、46歳)

10 自社ブランドEIZO開発

ブーツブームに乗って会社の業績は急速に発展しましたが、EIZOが開発した商品のすべてが問屋さんのブランドで売られ、そのブランドは一躍有名になるも、EIZOの名はお客様には知って頂けず、中にはEIZOのヒット商品を他のメーカーに安く作らせて利益を上げる問屋もいて、EIZOは大変矛盾を感じました。

EIZOが開発した商品をEIZOブランドで販売することにより、お客様の声を直に知ることが、より良い商品開発につながる事と思い、昭和57年、自社ブランドEIZOを開発し、東京・青山に(株)エイゾーコレクションを開設しました。

幸い、7センチヒールのブレンパンプスがヒットし、ブレンのEIZOさんと云われましたが、その後、ビューブランドの低寸パンプスがヒットし、一流百貨店の良い売場に、EIZOの靴をデビューさせる事が出来ました。業界では、低寸タイプの売れ筋は上代9,800円迄が限界で、それを超えたら売れないと云われていましたが、ビューに關してはその常識を破って11,800円で飛ぶように売れ、当時の業界用語で「ビュータイプ」と云われました。



当時、大ヒットした「Vue(ビュー)」の低寸パンプス



EIZO 大ヒット作品 No.156



履き心地を追求
Black Pumps

Check.

1



自分に合った靴履いてますか？

靴を綺麗に履きこなすには、
自分のワイズ(足囲)とサイズ(足長)を知ること。
エイゾーのブラックパンプスは全320パターンを
展開しているので、あなたに合う靴が見つかる！



詳しくは
ブラックパンプス
特集ページへ

http://www.eizo-collection.com/black_pumps/

Check.

2



歩いていると不安になりませんか？

骨格から研究を重ねた職人がオリジナルの木型を開発し、
靴作りをしているので脱げにくく、履き心地がいい！

Check.

3



長時間履いていると疲れませんか？

ヒールにしっかり身体の体重が乗る木型を使用しているので、
疲れにくく、歩きやすい！



シーンを選ばず履き続けられる
シンプルで美しいデザイン





EIZO PREMIO (エイゾー プレミア)
動物をモチーフにしたブーツたち



EIZO PREMIO (エイゾー プレミオ)
動物をモチーフにしたパンプスたち



EIZO PREMIO(エイゾー プレミオ)
ネックベルトが素敵なレディースシューズと可愛いパンダをモチーフにしたキッズシューズ(写真上段)



レディースのプレーンパンプスの多素材・多色展開にパンダやお馬さん等
取り外し可能なリボンで楽しんで頂けたら幸いです



EIZO PREMIO (エイゾー プレミオ) “ドレス・スニーカー” (写真右上と中央上の2足)
ドレスシューズでありながらスニーカーのような軽快で返りの良さを追求しました(セメント式)



メンズシューズは木型とインソールの設計等機能性を追求しつつ
レディースシューズで培った繊細なセンスで美しいフォルムが完成しました



ライセンスブランド
リーガルコーポレーション社の依頼による
イヴサンローランの高級パンプス開発に成功



本社・企画部にてオリジナルの木型を製作



ダイアナ社オリジナル ハーブヒール

11 グローバル化の波に対応して

昭和50年以降、高度経済成長の波に乗ってEIZOは急成長を遂げましたが、職人さんの高齢化と、経済のグローバル化を考えた時、安定した生産力の確保が不可欠であると考えました。

昭和61年12月 八潮市に新工場を建設し、草加市より本社

工場を移転

昭和63年3月 福島県石川町に製甲工場建設

昭和63年9月 八潮新工場建設

平成5年3月 福島県石川町に完成品生産工場建設

そして、更なる経済のグローバル化に対応すべく、

平成19年 ベトナム ホーチミンに独資でEIZO

SHOES VIETNAM(エイゾー

シューズ ベトナム)を創立し、日本国内

では作れない、手間の掛かるものにも対応しております。



平成5年3月 福島工場(著者62歳)
工場屋上にはEIZO創業の基となったVカットパンプスの赤い靴(写真上段)



2007年創立 EIZO SHOES VIETNAM (エイゾー シューズ ベトナム)
創立10周年 (著者87歳)



平成30年8月7日 埼玉・八潮 本社新社屋前





販社エイゾーコレクション スタッフ

12 顧客満足度120%を目指す

平成30年9月、EIZO八潮本社工場に隣接して、かねてから念願の自前のショールームがオープンすることになりました。

併せて、販社エイゾーコレクションも浅草から移転し、究極の製販一体の協力体制が確立致します。

そして、そこには新ブランド「EIZO PREMIO(エイゾープレミオ)」が登場します。

ブランドのコンセプトは「ご家族で楽しく履くことの喜びを感じて頂くこと」であります。

メンズシューズの「Mタイプ」は、マッケイ製法で返りの良い仕立てですが、EIZOの靴職人の原点に立ち返り、婦人靴で培った細やかなセンスを加えて、美しくて最高に履き心地の良いよう木型作りに念には念を入れて作成し、中敷きにはコルクとフットベッドを組み合せて、足入れの調整がし易いよう設計しました。

そして、もう一つの「DSタイプ」は「ドレス・スニーカー」、ドレスシューズでありながら、スニーカーのような軽快感を感じて頂けるよう、アッパーや底廻りに工夫して実現しました。

そして、レディースシューズとキッズシューズは、犬・猫・パンダ等、動物や鳥たちをモチーフにした「親子で和み、幸福を感じて頂けたら良いなあ」と思い、作って見ました。

そして、顧客満足度120%を頂くためには、EIZOというメーカーならではの出来ないサービスに努めます。

例えば、お客様の足の大きさが左右で違う場合、外反母趾等で変型されている足、通常では販売されていない特大サイズ・特小サイズ、その他アフターケアにつきましても十分対応させて頂きます。

13 靴とは我が命

以前、或る人に栄三にとって靴とは何ですか？と問われました。

「靴とは命です」と栄三は答えました。

少年の頃、生きるために心ならずも靴職人になりました。当時、自分の将来に対して迷い、悩みましたが、やっていく内に靴作りの難しき、奥の深さに引き込まれて行く栄三がありました。

人は誰でも自分一人では絶対に生きられない。それぞれが天から与えられた職を全うすることにより社会の為に貢献することが出来、生かして頂けるのだ。

自分は靴作りが好きだし、この道を極めることによって、世の中の為に役に立てることが出来るならば、それが一番良いことなのだ。そう思った時、栄三はそれ迄の迷いがふっ切れて、この道ひと筋、平成30年、米寿を迎えることになりました。

この度、栄三の靴作りの原点である紳士靴にチャレンジし、完成することが出来ました。

そして、初めての子供靴は、とても可愛いです。

栄三にとって「靴こそ命、我が命です」。

命ある限り、良い靴を作って、お客様に喜んで頂けることを願っております。

株式会社エイゾー（EIZO Co.,Ltd）

〒340-0831 埼玉県八潮市南後谷 669-1

www.eizo-co.co.jp tel. 048-997-1701